

特集：能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践

# 多人数型情報倫理教育のためのグループ討論 支援システムの開発と授業実践例

中村 栄治\*, 伊藤 翔太\*\*

## Development of a Group Discussion Support System for a Large Class of Information Ethics Education and Its Application Example

Eiji NAKAMURA\*, Shota ITO\*\*

### 1. はじめに

筆者らは大学の情報教育において、板書中心の教員から学生への一方的な知識授与的な授業ばかりでなく、事例を題材にして、授業のなかでほかの学生と議論ができる授業も必要であると考え、人とのつながりが把握できやすい一般社会とは異なり、直接目にすることもなく、価値観の異なる多様な人々とインターネットを介して知らないうちにつながっている情報社会では、他者の考えを理解し、多様な考えを知るとともに、自分の発言が他者にどのように受け止められるかを想像できることが大切である。さらに、情報社会では、誰もが等しく発言でき、不用意な発言が情報社会全体に悪い影響を及ぼしてしまう危険性もある。情報社会では、大谷<sup>(1)</sup>が指摘するように、情報倫理は与えられるだけでなく、多くの人々が参加して作り上げていくものである。授業において、これら情報社会の特性を学生に理解させることが大切であると判断した。

そのような授業を目指していくなかで、まずは授業環境を整えることを目標に設定した。できる限り同質ではなく、それと同時に、多くの人々と議論できる環境が重要であると考えた。筆者らが属する情報科学科は二つの異なる専攻（コンピュータシステム専攻とメ

ディア情報専攻）からなり、前者にはプログラムやシステムに、後者にはデジタルアートに興味がある学生が多い。異質要素を導入するために両専攻の合同授業とし、多くの学生と意見交換ができるようメンバを固定することなくグループ討論ができるような授業環境が望ましいとの結論に至った。

情報科学科1年生への情報教育として、情報社会および情報倫理の科目が設定されている。専攻ごとに開講していた授業を一つに統合し、2専攻合同の授業に変更した。受講生は年度により変動するが、本報告で取り上げる2014年度では261人であった。このような多人数の授業にグループ討論を取り入れるには、すべての学生が自分の所属するグループと、どのグループがどの座席位置に陣取ればよいかを授業開始時に把握していなければならない。

これら条件を満たすために手助けとなる情報機器は複数考えられる（例えばスマートフォン）。筆者らは2011年より携帯性と耐久性に優れた省電力表示デバイスである電子棚札（ESL: Electronic Shelf Label）を授業に活用してきた<sup>(2)</sup>。この経験を踏まえ、ESLを使うことで、上述した授業環境を実現するために、200人を大きく超える学生が受講するような多人数授業でありながらも、グループ討論を取り入れた授業環境を可能にするようなグループ討論支援システムを

\*愛知工業大学情報科学部（Department of Information Science, Aichi Institution of Technology）

\*\*プライマリ・メタ・ワークス株式会社（Primary Meta Works）

受付日：2016年6月5日；再受付日：2016年8月27日；採録日：2016年10月17日